

大学病院ざ瘡専門外来を受診した尋常性ざ瘡患者由来細菌の動向

¹東京薬科大学 薬学部 病原微生物学教室、²虎の門病院 皮膚科、³東京女子医科大学 皮膚科

○中瀬 恵亮¹、中南 秀将¹、野口 雅久¹、林 伸和²、川島 眞³

【目的】アクネ菌および表皮ブドウ球菌は、尋常性ざ瘡の炎症部から分離される。アクネ菌は、尋常性ざ瘡の炎症を引き起こす重要な因子であり、アクネ菌に対する抗菌薬は炎症性のざ瘡に対する標準的治療である。近年の欧米では、ざ瘡治療のための抗菌薬乱用による薬剤耐性菌の増加が大きな問題となっている。しかし、本邦における臨床株の薬剤感受性を調べた報告は少ない。そこで、本邦におけるざ瘡患者由来細菌の薬剤感受性を調査し、さらに薬剤耐性因子についても検討した。

【方法】2009、2010年に東京女子医科大学皮膚科の専門外来を受診したざ瘡患者91名から分離したアクネ菌69株および表皮ブドウ球菌58株を使用し、CLSIに準じた方法で薬剤感受性の測定を行った。また、アクネ菌ではマクロライド耐性に寄与する *erm(X)* 遺伝子の保有および23S rRNAの変異、テトラサイクリン耐性に寄与する16S rRNAの変異について解析した。

【結果・考察】アクネ菌において、マクロライド系抗菌薬およびクリンダマイシンで感受性の低下が認められ、耐性率は18.8%であり、高度マクロライド耐性に寄与する *erm(X)* 保有株が1株検出された。テトラサイクリン系では、ドキシサイクリンの低感受性株が3株分離され、その全てが16S rRNAの変異株であった。また、キノロン系では、ナジフロキサシンの低感受性株が3株認められた。従って、本邦のアクネ菌の薬剤感受性は低下傾向にあることが明らかとなった。また、マクロライド耐性アクネ菌が分離された患者からは、マクロライド耐性表皮ブドウ球菌が高率(81.8%)で分離されたことから、抗菌薬の使用による耐性化の影響が大きいことが示唆された。今後、テトラサイクリン系およびキノロン系耐性機構を解析し、さらなる耐性化を防止する必要がある。また、ざ瘡における流行株を把握し、特定の薬剤耐性アクネ菌の伝播を確認する必要がある。

会員外共同研究者：竹中祐子 (東京女子医大)

緑膿菌の各種抗菌薬に対する感受性率低下の解析、及び対策の検討

¹慶友会 守谷慶友病院 薬局

○溝口 綾子¹

【目的】当院では「各種検出菌の抗菌薬感受性率」と「抗菌薬使用量」のサーベイランスを行っているが、一部の菌がMEPM及びLVFXに対して感受性率が低いことが判明した。また、2011年9～12月にはMDRPのアウトブレイクを経験した。そこで今回、上記抗菌薬に対する感受性率の低下をどのように改善したらよいか検討した。【方法】2008～2011年の抗菌薬感受性率及び抗菌薬の使用状況を解析し、抗緑膿菌活性に優れているMEPM、LVFX、AMKに対する感受性率の変動に影響を及ぼした因子を検討した。【結果及び考察】4年間の緑膿菌の感受性率は、AMKは98%以上であったが、MEPMは80%台と低めだった。また、LVFXは91.1%、86.7%、81.3%、70.7%と年々低下していた。一方、抗菌薬使用量は、AMKは2009年からTDMを取り入れて使用方法の適正化を図ったため、若干使用割合は増えたが、治療効果も得られており、感受性低下も起こっていなかった。MEPMは、2009年までは使用割合が10%と高かったため、当院の感受性率のアンチバイオグラムを医師に提示し、エンピリック治療への適した抗菌薬選択を促したことから、2010年には使用割合を減らすことが出来、感受性率は横ばいだが低下は見られていない。一方、当院では内服治療を行う場合、LVFXが最も汎用されており、感受性検査結果が判明しても狭域スペクトルの抗菌薬に変えることはなく、LVFXの長期投与や再投与が行われている。そのため年々使用割合が増えており、この結果とLVFXに対する感受性率の低下には相関性が見られた。そこで今回、LVFXに対する感受性率の低下を抑えることを目標に、採用抗菌薬の見直しを行い、それぞれの抗菌薬の特徴や適応を提示することで、使用目的を明確にして適した抗菌薬を選択するよう促す取り組みを開始した。